

第22回 奈良県保健研究センター及び奈良県景観・環境総合センター 研究発表会 要旨

①清涼飲料水及び醤油中の保存料分析法の妥当性確認

保健研究センター 食品担当 安藤 尚子

令和6年3月に「食品中の食品添加物分析法の妥当性確認ガイドライン」（以下、「ガイドライン」という。）が策定され、食品添加物の使用基準への適合を判定するための分析法を導入するにあたり、その分析法の妥当性を確認するための手順が示された。そこで、まず食品衛生法第28条に基づく収去検査のなかで、検体数が多く前処理が容易な清涼飲料水及び醤油中の保存料分析法の妥当性をガイドラインに従って確認したので報告する。

②奈良県におけるカルバペネム耐性腸内細菌目細菌(CRE)の検出状況（2022年～2024年）

保健研究センター 細菌担当 足立 有彩

カルバペネム耐性腸内細菌目細菌（CRE）は、治療選択肢が乏しく、感染拡大した場合の危険性が高いことから、公衆衛生上の重要課題とされる病原体である。当センターでは、CRE感染症として届出された菌株について、厚生労働省通知に基づき、地域における流行状況を把握することを目的にCRE病原体サーベイランスを実施している。今回、2022年1月から2024年12月に届出され、当センターへ搬入されたCRE91株について解析を実施したので、その結果を報告する。

③奈良県におけるSFTSウイルスの初検出について

保健研究センター ウイルス・疫学情報担当 山本 紗也

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）は、主にSFTSウイルスを保有しているマダニに刺されることにより感染するダニ媒介感染症である。2013年1月に国内で初めて症例が確認され、同年3月に感染症法四類感染症に定められた。これまで奈良県でも年に数件程度の疑い例の行政検査依頼があったがウイルスの遺伝子は検出されず確定に至った例はなかった。今回、2024年6月に奈良県において初めてSFTSウイルスが検出されたのでその概要を報告する。

④レセプターモデルを用いた大阪府及び奈良県におけるPM2.5発生源の経年解析

景観・環境総合センター 大気係 村上 友規

2021年にWHOはPM2.5の目標値を5 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ に引き下げ、2024年には米国も同基準を9 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ へ改定するなど、国際的にPM2.5基準の強化が進むなか、国内においても、基準改定に向けた議論が進むことが予想される。これを見据え、PM2.5の発生源内訳および経年変化を精査し、行政施策がPM2.5に与えた影響に関する知見を整理することが重要である。本報告では、2016～22年を対象にレセプターモデル（PMFモデル）を適用し、発生源寄与解析を行った。

⑤WET手法による岡崎川の生物影響評価について

景観・環境総合センター 水質係 平井 佐紀子

水質改善が課題となっている大和川水系岡崎川は、令和4年11月の調査時に環境基準点の流末で著しい水質悪化がみられた。そこで、調査時に採取した岡崎川流末及びその上流1km地点の2地点のサンプルでニセネコゼミジンコによるWET手法による生物影響評価を実施した。結果、NOEC（最大無作用濃度）は、岡崎川流末で40%となりニセネコゼミジンコに対して繁殖毒性が認められたがその1km上流地点では80%であり繁殖毒性は認められなかった。